

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
昭和五十一年二月十五日 發行(毎月一回・十五日發行)

(通第三二〇号)

次
親鸞聖人と私……………池山栄吉……………(1)
「逆境の恩恵」抄……………高千穂徹乗……………(7)

一道会の記……………榑原徳草……………(12)

目
念仏詩抄……………木村無相……………(18)

求道の枝折……………花田正夫……………(20)

慈光

第二十八卷

第二号

親鸞聖人と私

池山栄吉

闇より光へ

「かなしきはあくなき利己の一念をもてあましたる男にありけり」 啄木。

あの時の私の気分は丁度こんなものだった。まじまじと放逸な欲求につかまれて、そのさいなみからのがれようと、もがく氣力さえもくじけてしまった。

それまで若存若亡のたよりない状態になった仏の幻影は無論このときも消えていて、仏とは人間の妄想が造り出した概念にすぎない、と思いきめなければならなかった。

日頃出にくかった念仏が、てんで出て来ないばかりか、何方に向って逃げ路をもとめたものか、その見当さえもつかなかった。

外界のままになる、ならないはさておいて、自分で自分の心をどうすることも出来ないとは、この時つくづくおもしろいられた。

自分の腑甲斐なきに思っていたと同時に、これまで私がしいままであせった。

すると真暗闇のなかに一点の光の浮かび出たように——不図胸にかんだのが「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人のおおせをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」の文であった。

二河白道を前にみて、進退きわまった旅人の耳にはいった、東岸発遣の音がそれであった。

私の眼はこの文に見入った。私の耳はこの文に聞き入った、私の心はこの文に凝った。

その刹那、焼石が水を吸い込むように、心の奥までこの文が浸み透った。

西岸招喚の音が聞えたのであろう。私は心にある衝動を感じてハッと我にかえった。信仰の門をひらく手がかりが見つかったのだ。

私は、親鸞とあるのを私と読んで、よき人とあるのを親鸞聖人と読んだ。そしてその文を口の中でくりかえしたかと思つた途端——ドッと念仏が口を衝いて出た。瀧のみなきり落ちるような勢で、しかもかつて覚えのないやすらかさをもつて。

今まで心を占めていたやるせないさびしさはいつしか消えて、何とも云えないたのもしさが心の底から湧きあがるのを覚えた。これが他力の真境だな、とはじめて知ったと

生涯の目的として、たえず追求して来た名誉というものが問題となって、結局自分は残念ながら、到底名誉を背負う資格がないしその主となるべき自分が無力だから——とあきらめなければならなくなった。

目的のなくなった人生！何たる味気ないものだろう。名誉などと、そんな浮いた話をしている場合でない。今

現にこう悪い心がむく／＼と起つてきて、それを押えつけようとすする良心が、ピシピシはねかえされる始末では、私の究極の運命は、この世からなる永劫の地獄の外にない。

私は絶望と恐怖そのものであった。

人なき空曠のはるかなるところに、悪徒、猛獣、毒虫に追いつめられた二河白道の旅人は私であった。

ああこういう時に本当の信仰があったならば、強烈な真信の願求に、息はずみ、胸はちぎれんばかりになった。迷子になった幼童が、あわただしく母をたずねるよりにいらだつ心は、今度こそ真の仏を見つけようと、くるほきの心地！廣大難思の慶心とはこれを見たものか、体験の上から推知される。

こうして直接親鸞聖人のお手引によって、大悲選択の願心にひきあわされ、ただ念仏の心のおこると共に、心光照護の境に置かれた。これは私の四十二の時であった。

「平生のとき善知識のことばのしたに、帰命の一念を発得せば、そのときをもて娑婆の終り臨終とおもうべし。」

世にいう厄年に「前念命終」を体験して、それから今日まで「後念即生」の日暮しをして来たうちに、不思議の一つに数えられるのは、まえには口に出にくかった念仏がやすやすと称えられることと、仏の存在——体験後にあつては特に阿弥陀仏の存在——が、もう問題にあがらなくなつたことで、これが白道を踏んで疑快退心を生じない他力の金剛心——有漏の穢身に宿る——というものかと、われながらそぞろに勿体なく思うときがある。

「唯念仏の衆生を觀(みそなわ)して、撰取して捨てず、この故に阿弥陀と名づけたてまつる」濁悪の群萌を悲引したもう如来、私達に間に合う唯一の御名。どうして南無阿弥陀仏と称えずにいられよう！

内に我心をみつめる

去年の暮頃のことであった。明けて来年は開宗七百年に当るそうだが、どうかこの機会に、聖人を手に取るように

ありありと、自分も拝見し、人にも紹介したいものだ。それには一体どうしたらよいだろうか？とちっと思索をこらしたのだった。

まず第一に考えるまでもなく自明の方法と思われたのは聖人の御一生をくわしく歴史的に詮索して、その真相を紹介することであった。

それには「御伝鈔」をはじめ、だんだん文献もあるようだから、それらを一々調べて見ようかと思った。

が、それは随分——私にとつては——大仕事だし、よしやってみたところで、果して私の思っているような聖人が現前されるかどうか？まだ手もつけないうちから、はやくも疑がきざしたのであった。

本当に専門的に立入って深く研究したならいざしらず、いい加減の素人詮議で、ありふれた材料から、聖人の人格がごまかに、正確に、生々と、浮彫にしたようあらわれて来ようとはとても思われないことであつた。

いにしへのなべての聖賢とか、偉人賢士とかにしてみれば、私達は聞いたり読んだりして、多かれ少なかれ知っているだけの材料で、趣味と必要の存する限り、ほぼその人柄の輪廓を想定する。それが私達のその聖賢とか、偉人賢士とかについて知っている全分であつて、私達はその想定に對して——氣に入ろうがいろいろまいが——別段異義をさしはつて来るのを覚えた。

それは外のことではない。まことの親鸞聖人を拝見しようと思えば、眼を外にばかり向けては駄目だ。内にわが心をみつめると、そこにチャンと控えておいでになるということだ。

これがその問題の解決として適當かどうかは知らないが、本當の聖人は、この方法を外にしては拝見出来るものではない、ということだけはたしかにおもえた。

おもうにこれは別段に珍らしい思付ではあるまい。恐らく昔からそれと明言した人もあろうし、現にそう感得して人も多々あろう。ただ私としては、あちこち探し廻った揚句、ようやく聖人の在所をつきとめた自身の実験が、灯台下暗しの譬も思い合わされて、おかしくもあり、とうとくも感じられる。

この実験があつてから、對聖人の關係が、革新されたとは思えないが、従来よりも一層緊密を加えた——むしろ融けて一つになった、と言つた方が実感に近いかもしれない——ことはあらそえない。

「一人居て喜ばば二人と思ふべし。二人居て喜ばば三人と思ふべし。その一人は親鸞なり」の文にしても、以前は私が一人で喜んでいて、聖人もすぐ傍に居られて、一緒に喜んで下さるのだ、とばかり思っていたのであつたが、

さむべき理由がない。

が、親鸞聖人にしてみると——人はいざ、——私には——そうは行かない。私が聖人の筆に、口にせられた文言を知っているのは——少なくともその深さにおいて——僅かなものだ。聖人の御伝記については、殆んど知っていると云われない。二三文献を読んだことはあるが、どれだけが果して歴史的に正確なものかを考えたこともないのだから。

それでいて私には——一斑をみて全豹を知るともいったものか——聖人がかなりわかつてるような氣がしてゐる。

これこそ的確な史料によつてしらべあげた結果だ、と主張するものがあるが、若しその結果が、私の思っている聖人と違えば、その調べが間違つてると、先天的な断定をさへ下しかねない確信がある。

実をいうと私には、いにしえはもとより、現代でも、聖人のほどにわかつてる人格はないのだ。

私はあの問題——どうしたら聖人をありありと拝見することが出来るかという——を間がなひまがな、とつおいつして考へた。その揚句——何時だったか今覚えないうが——或時不図おもいついたことがあつた。そしてその思いつきを、再び考へ一考した刹那、微笑がおのずから唇辺にただよ聖人の在所が知れた今では、私の喜ぶころのうち、聖人の御喜びも流れているからは、私の喜ぶ心、即、聖人の御心といただける。

「その一人は親鸞なり」のお言葉は、私達の喜ぶときばかりでない。私達の歎き悲しむ場合にも、怒り狂う場合にも、その他煩惱具足の凡夫として、さまざまのあさましい情を馳せる場合にも、母の子をおもうような憐念の意味で繰りかえされる。

「親鸞もこの不審ありつるに唯円房おなじころにてありけり」すべてがこの調子だ。何のことはない、私達が迷い歩いて途方にくれそうなた々には、チャンと先へ廻つて待つて居て下さるのだ。

煩惱具足の凡夫と「かねてしろしめして」、身を苦毒の中においても、飽くまでも見捨てぬ大悲の悲願を、体現された聖人なればこそ、こうも徹底した同感の態度に出られるのだ。

「踊躍歡喜のころもあり、いそぎ浄土へまいるたく候わんには、煩惱のなきやらんと、あやしくそうらいなまし」とあるのも、隔て心のやまない私達の逃げようにも逃げられないように、物見の上で見張つていて、声をかけて下さるので、雲居寺の阿弥陀仏が、逃げる人の袖をとらえたという夢想も思い合わされる。

「悲しいかな愚禿鷲、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることをよるこぼす、真証の証に近づくことをたのしまず、恥ずべし傷むべし」と、聖人の歎きをうけたまわっては、罪業の織り出す幻影にあこがれて「あたり身を仏になすな花に酒」と、苦惱の旧里を榮しいところとさへ見る錯覚にもあそばされる無慚無愧を見出さずにはいられない。

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなきよ」何たる深刻な充実した真情の流露だろう！「よき人の仰せをこうむりて」信じたまうた際に、深く深く刻まれた自己内面の披瀝とかがわれる。私達にはとてもそんな周到で完全な、しかも簡潔で的確な、嫻々（じょうじょう）たる余韻を含む言いあらわしは出来ないにしても、心に思っている内容は実際その通りに相違ない。だからこの聖人の常の仰せは、私達の迷懐としてそのまま借用してさしつかえない。

総じて聖人が御一心にかけて仰言った言葉は、聖人にしてみれば、ただ御自身のお感じを述べさせられたにとどまるのだが、私達から見れば、そのお言葉がそのまま私達へのおさとしときこえる。しかもそれが煩惱熾盛の衆生とし

るのは、煩惱の水を菩提の水に溶かす大信海の転化作用ともいつべきもので、この作用あればこそ、私達は「ただほれほれと弥陀の御恩の深重なることを、つねに思い出しまいらせて」わがはからいをはなれた自然法爾の妙境に自適して、底力のある生活させていただけのだ。

「念を難恩の法海に流す」とは、こうした日常生活の推移を言ったものと解せられる。他面「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」とよき人の仰せに信順したところが、即ち「心を弘誓の仏地に樹て」に違いない。心が一旦弘誓の仏地に樹てられた上は、念はおのずから難恩の法海に流れて行く。聖人のお慶びは即ち私達の慶びだ。

聖人のお言葉をこういう風に並べ立てて一つ一つ味わっていつては際限がない。

要するに聖人のお言葉——はそれが悲歎なのであれ、感謝なのであれ、はた解釈であれ、勸誡であれ——一々みな私達に——随分意地悪く批評の眼をもって見る癖のある私達に——そのまま受け入れられる。これは実に驚くべき他に類例のない不思議なことだ。

ところが、それよりもっと不思議なのは、私達が勝手なことを思ったりしたりすることが、きつと聖人のいづれかのお言葉に関連して考えさせられることだ。「眺むる人の心にそすむ」とは聖人にもあてはまる。——これはどうで

て私達とおなじ立場からの仰せだもの、私達の心に強い響きを与えるどころか、私達自身の内心の叫びとしか聞こえないことがあるのは、もとよりその所といわなければならぬ。

「なにごとくも、心にまかせたることならば、往生のために千人殺せといわんに、即ち殺すべし。然れども一人にても殺すべき業縁なきによりて害せざるなり。わがころのよくて殺さぬにはあらず。また害せじと思ふとも、百人千人を殺すこともあるべし」、「さるべき業縁の催せば、いかなる振舞いもすべし」、「わろからんにつけてもいよいよ願力を仰ぎまいらせば、自然のことわりにて柔和忍辱のころもいでくべし。すべてよろずのことにつけて往生にはかきこき思いを具せずして、ただほれほれと弥陀の御恩の深重なることを、つねにおもいだしまいらすべし。しかれば念仏も申され候」唯円房はたびたび聖人からこういう風に聞かれていたに違いない。

善いことをしたいにもしおうされず、悪いことをやめたいにもやめられず。一日中、善悪のおもうようにならないのに苦しんでる私達——七百年後の私達に、どれだけこのおさとしが、たよりになることだろう！「悪からんにつけてもいよいよ願力を仰ぐ」ようならされた私達に、柔和忍辱なり、勇猛精進なり、臨機に當為の心が出て来ようとお

も私達の心と聖人の御心とが一つになっていて、私達の心の隅々まで聖人の御心が満ちている結果とみるより外、解きようのない謎だと思ふ。

しかしまた翻って考えて見れば、そうあるのは当然のことだとも思える。私達には、聖人は私達と同格な凡夫として、横超の真教をひろめるために、この世に來化したまうた弥陀としか思えないのだから。

衆生の成仏のために、自分の成仏を賭けられた無碍絶対の仏心と、功德の体となるという煩惱成就の凡情とが、信樂開發の時尅の極促を合図に、一つに融け合うのに何の不思議があろう！

多生曠劫この世まで 憐みかぶれるこの身なり

一心帰命たえずして 奉讃ひまなくこのむべし

子の母をおもうが如くにて 衆生仏を憶すれば

現前当來遠からず 如来を拜見うたがわず

尽十方無碍光の 大悲大願の海水に

煩惱の衆流帰しぬれば 智慧のうしおに一味なり

——(完)——

「逆境の恩恵」抄

高 千 穂 徹 乗

眞 実

親鸞聖人は、その一生を通じて眞実を求め、眞実をあらわすことに全人格をうちこまれたかたであります。聖人は自我と人生との眞相をつきとめて、貪欲、邪見の凡愚としての自己のすがたに直面し、そらごとたわごと、まことあることのない自己と社会のありさまに悲泣された。そして「眞実」というのは如来のお誓いひとつであり、この眞実の願心を深く信じてうたがわなないことが、まことの智慧であることを体得されました。

淤泥の蓮華

まことに私は煩惱づくめの凡夫である、念仏にふさわしくない悲しい存在であります。煩惱づくめの凡夫は泥のようなものである、このような泥のなかに、蓮の花がひらく、ほんとうにありがたいめぐみであります。

私は自分のあさましさをかえりみるにつけても、いよいよ深くめぐまれた生命の花をたたえると共に、あさましい

手術後十四年の月日をすごしましたので、声の出ない不自由にも、大分なれてきました。月日がたつにつれて、私が一番淋しく思うのは、声にだして高らかにお経をよみお念仏をよるごぶごぶできないことでもあります。

如来の誓願には多くの念仏をとなえねば救われないと申されてはいない。また、称えねば助けてやらぬと誓われているのでもありません。称える私の力をみとめて救いたまうのではなくて、たとえ一声の称名はとなえ得なくとも、ちかいの御名を信ずる一念によつて、不退の位に入り浄土にめされてゆくことに、いささかの間違いはないのであります。

しかしこのような広大な慈恩を頂くにつけても、声に出しておやさまの御名を呼び、声をはりあげて仏徳を讃仰し、法味を語り合うことができたらどれ程たのしくはばれとすることでありましょうか。

二の世の唯一の思出

過去六十余年の私のささやかな一生をふりかえりますと様々な喜びや悲しみの思出は沢山ありますが、そのひとつひとつをとりだして、つきつめてみると、一つとしてお浄土まで、もってゆけるようなおこないも、思出もみつからぬようであります。

せつかく人間に生れて、様々な苦難にたえて、今日まで

泥沼の生活をあやまりながらくらさねばなりません。

無声の身に

私は声帯ガンのため喉頭を摘出する大手術をうけ、九死に一生をえたのですが、その後経過がよくて満十四年の月日を無事にすごしました。

私の病気を心配された多くの法友が、つきつきと死んでゆかれて、私だけがとり残された淋しさを覚えます。然し生きながらえたお蔭で、ご本山の安居講習会で、法然聖人の選択集と、源信僧都の往生要集の講義をつとめさせてもらい、宗師の書きのこされた多くの著述を拜見して、そのあたたかい体温にふれ、そのほがらかなお念仏の声を身じかに聞きとることができたのであります。

しかるに私は声をうばわれてしまいましたので、この世でいちばんたやすいお名号を称えることができない。ほんとうに私のような業（ごう）ざらしのものは少ないと思うのであります。

すごしてきましたが、本当にこれでこそ人間に生れた甲斐があったというようなことが見出せないであります。そこになりますと良寛さまでありましたか

不可思議の弥陀のちかいのなかりせば

なにをこの世の、おもいでにせむ

とうたわれたように、本願にお遇いできた思出こそは、今におけるただ一つの尊いめぐみであります。私達は一人一人宿業のありだけをさらけださねば、死ぬにも死ねないものであります。おのれの業苦に泣いた涙のしたから、ニッコリと笑うことができる心ひとつを失わぬようにして、自分自分の分に応じたつとめを果して行きたいものであります。

人間の機械化

西洋のある社会心理学者は、現代における人間の条件について書いた論文に、十九世紀の問題は、神が死んだということであつたが、二十世紀の問題は、人間が死んだということであるといっております。そして将来の危険性は、人間がロボットになるということだと指摘しています。

人間がロボットになるということは、人間が機械化され商品化されることで、個人の主体性とか自主性というものに軽視されるか、無視されてしまうのです。

それをふせぐには、人格の尊重が叫ばれ、個人の自由と

権利をまもることが強調されています。然し今の社会は、人と人がばらばらに引きさかれて、お互いの良心や善悪を信じられなくなっています。そこで自分が生きるためには、他人の不幸をかえるひまがなくなり、ひとりひとりが全くひとりぼっちな孤独な心で生活しています。

そこで、あなたはいま何を信じて生きていますかと問われても信ずるものはこの世の中に何もない、しいて云えば自分自身を信ずるだけで、それもそうとも思わねば生きてゆけないというのが現状でしょう。

○
このようなすぐらい愛欲動乱の猛火にまきこまれて、身動きのとれない深刻なやみをうけて、その中でのおたうちまわり、幾度もあやまちを繰返しながら、ほとほと自分自身をもてあましていく。この猛火を転じて清風とさせて下さるのが弥陀仏の本願念仏であります。

めぐりあい

私達は、一生のうち何度も生れかわって始めて一人の人間として成長してゆきます。このような脱皮というか転身というか、自分のうまれ変りをする動機となるものが、「めぐりあい」の事実であると思います。

私自身が、色々な苦難にあり、さまざま難関につきあたって、人生の裏表を知ることになり、そこでいよいよ

からではなく、あの世の光であります。私たちはこの光に照りかえされて、自分の姿をみかえし、御仏の願力にうちまかすほかに道はないのであります。

○
仏様の浄土を美しい七宝莊嚴の世界と説かれても、私達は到底その形相を見ることは出来ません。念仏とは私が仏を念じ浄土を観ずることではなく、私が仏の本願に遇い仏の名号を聞信することによって、深い自己内省と、それにもとづく生活態度の転換を体得することであり、それはこの世からあの世へでなくて、逆にあの世からこの世への道がひらかれることによって、彼岸の浄土が現世を照らす光の根源となるのであります。即ち現世は、後世としての浄土をもつことによつて、真実の現世となり、その浄土は常に私達に働きかけ、現実を解決する力となるのであります。

○
大きなつなみのあとに残るものは天上の月ばかりといわれるように、すべてのものを洗い流したあとに、月の光が照りかがやいている風情を宗教体験の極地にたとえられます。私達が聞いて聞いて聞きぬくところ、いつの間にか仏のはからいによって、私のはからいが打ちくたかれ、疑うすべもなく、はからう力もつきはてて、ほんにこのままのおたすけであったかと、ほれほれと願力にまかせ、念仏申

苦惱が深くなり、心のまどいも大きくなりますが、このようなきに、思いがけぬ立派な人物に出遭い、あるいは不朽の名著をひもといて、正しい道標を見とどけることができるものです。

親鸞聖人が「よき人の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」というすなおな信順の心になられたのは、思い難い恩師法然聖人にあり、聞きがたい念仏往生の教えを聞くことが出来たからで、このようなめぐりあいにおける信順と感謝とが、宗教の根幹を貫くものであります。

浄土は現世を照らす光の根源

まことに私の存在は、その一分一秒が、死に直面している生死的存在であります。真実の宗教は、この生死的存在としての私の苦惱を解消するものであって、単に生きることだけのために利益を与えるものではなく、また死ぬことの恐ろしさだけに力を与えるものでもありません。生と死を一枚のものとして、生のとるところと、死の帰するところを明らかにするものであります。

私がいかにげんなりな気持ちで、毎日をすごしているあいだは少しも気になりませんが、いろいろな災難につきあたり、行き詰った破目になると、自分の全体を投げ出すよりほかはないのであって、この行き詰りをきりひらいて、さらに新しい力を与え、前途に光を点するものは、この世のち

○
さんと思いつつとき、仏の名号が私の信となり、念仏となり、拝む手となり、たしなむ心となって下さるのであります。

私のように真宗の教義を幼ない頃から修学させられたものは、自分の理性によって教義の型の中に自分の心をあてはめ、自身で造りあげた仏像の前にぬかずいて、ほのかなよろこびを感じ、一時の平安をむさぼっていました。

けれども砂上の家は少しの風にも基礎がくずれるように自分の理性によって構成されたくう像は、いつか自分の理性によって破壊されるときがくるのであります。

私はいわねはた信心の殻を胸に抱いて、京都の高徳をたすね、奈良の念仏道場を巡歴して、すなおな村人の法悦の姿に接したのですが、自分のはからいで作りあげた信心を捨てたことは、なかなかむずかしいことでした。しかし高あがりした私の心に、きびしい痛棒がくわえられ、すべてのはからいが打ちくたかれて、すなおに仏さまの慈愛を領納せずにいられない時が到来しました。

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案すれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、助けんと申し召し立ちける本願のかたしけなさまよ」と感謝された聖人の深い体験や、法然聖人が、

長い求道のあと「予がごとき下機の行法は、法蔵因位のむかしかねて定めおかるるおや」と叫ばれて、高らかに念仏されたという転心の事実は、まことにすごそかなものでもあります。

あとがき

私が七十五年の生活で知りえたことは、人の世のむなしさと、人の心のみにくさとであった。そしてこのむなしさとみにくさを掘りさげて、そこに仏の本願という地下水にあたったのであります。

仏の大悲は私の無明煩惱のやみの奥深くを照す光であります。この光によって煩惱が煩惱と知らされ、そこから無明のやみに、ほのかな光がさして、私が仏の心光の中にあることに気づいたのであります。

私は近年老朽いよいよ加わり、著述の筆をとる気力もないので、十余年前に刊行された「逆境の恩恵」を重版してもらいました。本書を縁として一人でも心魂の転換をして頂けたら望外の幸せであります。

昭和四十九年早春

稿了

一道会の記

昭和五十年十月二十六日、今年的一道会が開かれた。今年は故池山栄吉先生の三十八回忌、故池山寿夫様一周忌、併びに故松本解雄先生追憶の法話会として的一道会である

会は午後一時からであるが、十二時半から松本先生の御分骨の番号碑への納骨式、併せて故広瀬章子様の納骨式も行った。広瀬様は長崎の方で毎年参会された方だが急逝され、長崎の松本さんの話によると、お一人で縁者もないので番号碑に納めて頂きたいとのことで、深い仏縁によって本日の御納骨となった。諸兄姉参集して、碑前に先師の番号を拝し、私は讃仏偈を誦し、式を終らせて頂いた。

今日の集りは七、八十人で、遠く長崎、四国香川、高知、東京その他からであった。昨年のお春に池山先生の御次男の敏郎様から頂いた先師揮毫の墨跡のうち大画箋紙に先師一流の雄健な筆の跡

たのまるる唯念仏のわれにあり、さるべき業はさもあらばあれ

新春法信抄

熊本市 高千穂徹乗
元旦 寿春

念々撰取之中
註、師の生前に投函された賀状。

茨木市 経谷 芳隆
おほようにきくにあらずや 古稀の春

糸魚川 永山 あや
三年越しの娘の病床にて

子の病己が病と悩みたまふ母親の慈心仰ぐ新春
大磯町 時志のぶ

近角きそ子奥様のお歌を年頭にかかげて
世の闇のくらきにつけて明けき星の光はいよいよ輝く

岡山市 岡島 清香
お正月来ればわたしは幾つかと精薄の子はしんけんに
きけり

名古屋 荒川そおべえ
ののみちに うかぶこいしのひとつひとつに

ふゆのゆうひは かげをやどしき
福岡県 金丸 照子

師は説きぬ 信なきわれに添寝して 弥陀のおいはれ
深く厳しく

榊原徳草

の幅と、半折の、
しかるに仏かねてしろしめして
の幅とを奥の間の床に掲げて、新表装のものを拝した。
申すも変な事だが、費用は従来の一道会への御香花料でま
かなわすて頂き、皆様の御力によるもので厚く感謝する次
第である。

一時から阿弥陀経誦読、歎異抄拝読、私は毎年のこと
ながら「幸に有縁の知識に依らずんばいかでか易行の一門
に入ることを得んや」の所で胸塞り、涙に念仏する外な
った。好きな人に邂逅し、口うつしに恰も母が噛み砕いた食
物を子の口に唇を合わせて母の方から与えて下さる、その
ように「唯念仏して弥陀にたすけられなさい」と法然聖人
の仰せのままにただ念仏一つに、ひかりの瀧に浴された聖
人の御姿をおしのびしたことである。

先ず開会の辞ともいべき私の御挨拶を最初に掲げさせ
ていただく。

今年はい白井先生三回忌、池山寿夫先生一周忌、そしてこの二月十八日に突如として亡くなられた松本解雄先生の追憶の一道会であります。遠く九州、四国、東京その他からようこそ御参下さいまして有難うございます。池山先生が亡くなられてすでに三十八年、先生のお残し下さったのは南無阿弥陀仏ただ一つであります。憶うに真如一実の法界から阿弥陀仏と顕れて此方に近づいて下され、印度には釈迦牟尼仏と現われ、此の土に種々の姿をとって吾等を導いて下さったのであります。特に親鸞聖人が我々に何の注文もなしに日常の生活の中に進み入られて、池山先生のお言葉を借りて申せば「オネガイダカラスグキテオクレヨ」と仏の方から頭を下げて私共の手をとり身体を抱いて下さる。我々はいつ生れたか知らない、他人の死期は予想しても自分の死期は知らない、生れた時も親から聞いて知っただけで、又死ぬ時も知りません。あだかも頭も尾もない魚が遊々と池の中を「私は魚である」と泳いでいるようなもので、自分は魚と自任していても、見る側の人からは怪物としか思えない、それは魚ではない。このような何とも形容できない私共に、色々な姿をとって大悲の仏様の方から近づいて下さる。

池山先生は三十八年前に浄土へ還帰されましたが、この

母)を亡くした悲しみのどん底に、大いなる火のように燃え上るよるこび——これを一人でも多くの人々に！という居ても立っても居られぬねがいが、父をしてペンを探らせずにはおかなかつたのです。私の幼い弟妹たちが寝しずまった枕元で、夜の更けるまで机に向っていた父の姿を思い出します。その側には亡き母がびったりと寄り添っていたのでしよう。父はよく独り言をいう人でした。『さあ、ここはこれでいいかな』とか『まあまあ、こうかね』とかよく声に出していました。また独り言いつている、と私はおかしく思ったものでした。うれしそうに父の顔が目映ります。

昭和三十九年秋。

名古屋市中にて 栄吉息、池山寿夫

こんなことを追憶して私の挨拶を終わります。

ついで花田先生のお話は次のようであります。

いつも欠かさず一道会にお出で頂きました松本先生の死は私に大きな教えを残して下さいました。それは真実の友

土にあって念仏の真実を私共に興えたいための浄土から出まじでありました。松本先生もそうであります。只今この色衣を着て一道会の勤行をいたしました。が、実は昨年、私は今後は黒衣に還えらうと思ひ黒衣で勤めたのですが、松本先生がその時、なぜ色衣を着ないのかと問われますので、黒衣に還る決心を話したことでしたが、今年は先生の言葉を偲び色衣を着たのであります。

あれや、これやと先生方について思出はありますが、池山先生の「ただ念仏して——たのもしさ」が心身に焼きつくのであります。

寿夫様が南米から交換船で帰られ、御父君のお写真の前に坐られた時、むせび泣いて合掌念仏されたお姿を今もそらに見るのであります。又先生の意訳歎異抄の再版の時その書の後の跋文に

「洛西嵐山に近き浄住寺の境内、しじま深き所に亡き父池山栄吉の碑が建てられました。それは二十七回忌を機縁として一道会の方々によって建てられたのであります。碑面には故人の筆を刻んで、ただ南無阿弥陀仏とのみ。これだけだよ、これだけしかないんだよ」と故人生前の口癖をそのまま聞く思いがします。そしてその記念として本書が刊行されました。父が歎異抄の口語訳を思いたったのは、極めてせっぱつまつた気持からでした。愛妻(私の

情、永遠の友ということでもあります。

池山先生が亡くなられた時は、よき師、よき親にお別れして存分に悲しませて頂きました。夕陽が西に沈みます時に月と星が皎々と輝きますように、友も師も親も亡くなつてのちにすこしづつその本来の姿を知らされはじめるのであります。昔から阿呆の智慧はあとからと申しますが、生前にはまことに軽く思っていたことを愧じ入ることであります。こうした私はよき友、久遠の友情ということをとつおいつ心に浮かべておりますについて、かつて覚えたドイツのウーランドの詩を思い出します、ここで一読いたしまし

よう。

「人生の渡し場」

年流れけりこの川を ひとたび越えしその日より

入陽に映える岸の色 せきに乱るる水の音

同じ小舟の旅人は 二人の友と我なりき

一人の面は父に似て 若きは希望に燃えたりき

一人は静けく世にありて静けきさまに世を去りつ

若きは嵐の中に生き 嵐の中に身を果てぬ

幸多かりしそのかみを 忍べば死の手に奪われし

いとしき友の亡きあとの淋しき胸に迫るかな

されど友垣結うすべ 魂と魂との語らいぞ

かの日の魂の語らいに 結びしきずな解けぬやも

受けよ舟人舟代を 二人の友とうち連れて
再び越えぬこの川を。

これはウーランドがラインの支流ネッケル河を渡った時の詩であります。昔三人の友垣があつて、この川を渡った、一人は物静かな人、一人は元気な人、二人共に今は亡く自分一人で渡っているけれど、魂と魂との交りは、今でも三人で居るのだ。渡り終えて舟人に、三分の舟代を渡した、という詩で、ドイツばかりでなく、日本でも心ある人々に愛唱されて居ります。

私も今こうして一道会に出させて頂きましたが、松本先生、寿夫先生、白井先生が眼には見えませんが何処かに坐られてジッと見守っていて下さるのを覚えます。

松本先生の思い出を申し上げます。私は岡山医大の三年の時退学して京大の哲学に入りました。岡山を出ます時、着のみ着のまま我武者羅に飛び出しましたので、沢山の方々に御迷惑をおかけし、又沢山の御恩をうけてまいりました、當時を想うと夢のようであります。京都府下八幡在の横田先生の寺に身を寄せて貰つて通学しました。

それまで科学だけの世界で居りました私には、哲学の世界は一寸戸惑い致しました、友人も一人もなく黙々と過しておりました時、仏教青年会のビラを掲示している学生さんがあつたので、はじめて話しかけました、それが松本先

たのですが、或夏、松本先生が訪ずれられて

「今日も堤ぞいに来ましたが、堤に夏草が種々の花を咲かせていました。道々その花に心をうばわれていい気になっています、ガサツと音がしました。私は蛇が大嫌いなので思わず立ちどまって足元を見廻わし、そうでないと判るとホッとしましたが、私共の人生行路にも名利や愛欲の花に心うばわれては、無常の蛇の音に足下をかえり見せられ、又しても性こりもなく迷うのですね……」

と感銘深く話して下さったことを覚えております。

松本先生は、下鴨の羽溪了諦教授の主宰せられた知四明寮に居られましたが、寮生の方々に驚きがおこり、段々念仏申されるようになり、自然に集いが出来、京都学生親鸞会が生れました。私と松本先生とは性格も違つていまして、我武者羅で私の強い私に反して、非常に円満な立派な方で、口数の少ない人でしたが、内にしっかりとしたものを持つていられて、会の中心となつて下さいました。

卒業しましてから松本先生は教育界に入られ、大阪、四国と移られ、私は大連や名古屋の別院から保護司などをして、辿る道はことになりましたが、生涯を通じて無二の信友となつて下さつたのでした。

然しはじめに申しましたように、物はなくしてその真価を知りはじめるので、先生の御在世はその友情を軽く

生でした。松本先生は青森県蟹田町の寺院のお生れであります。弘前の高校を出て京大の法学部を卒業せられた方ですが、法学では何か落着かないので、哲学科に再入学して来られた由でありました。

そこで松本先生と期せずして同じ学び舎に机をならべました。種々話し合っているうちに、松本先生は親鸞聖人の真意にふれたいと真剣に求めていられることを知りました。その秋に横田先生の寺の報恩講がありまして、松本先生が参詣され、熱心に聞法していられました。二日目の朝でした、「どんなに聞かせて貰つても、読みましても判りませんが、清沢満之師の書に『求める心もすでに興えられている』とありましたのを思い出して驚いております」と一口言われました。「そうです、聞かせて貰うていると、自分に智目も行足もないことが知れ、その者かねてお見抜き下さつての大悲心から、求めずにいられなくして下さいなのです」と語り合いました。その頃何か非常に感じて下さつたようでありました。その後度々お出で下さつて、お遊びの歌を示されました。それは

行きずりの人皆われにほほえみて、ふるさとに似し
なつかしの村
でありました。

横田先生の寺は、木津川の堤をそつて八幡からよく歩い

考えていましたが、浄土に足早やに還えられた今日、大変な友を亡くした、久遠の友とはこういう心の交流から感知されるのだなあ……と、かけがえのない尊いものを教えられまして、慈光の十月号に真実の友情ということを書きまして、心の記念碑とさせて頂きました。

この世に、学友、同郷の友、趣味の友、同志など色々ありますが、限りある縁で結ばれた友は、遠ざかれば忘れ、離れるとうんとんじて、崩され、消されて終ります。このことは親子、兄弟、夫婦でもそうです。絶対の御縁に結ばれた友達は、時と処をこえ、更に生と死をも超えて心の交流はいよいよ強く知らされます。

こうした心で暮していますうちに清沢満之師の「真の朋友」を取り出して拝読して、その真味をあらたに教えられました。「真の友たらんとするならば、自ら絶対の基盤に還れ」とあるのが師の友情論の中心であります。仏の絶対の真実心に還えると、そこで満足し、一人立ちが出来る。互に済むとかすまぬという気ずかいも無用となり、友の善悪を選ぶこともいらず、自然に業報を異にしたまふま、地下水がずうつと通うように、心の不断の交流があるのです。

武者小路実篤さんの色紙に「君は君、我は我なり、されど仲よき」とありますが、実篤さんはどうしてそうした心

境を得られたのか知りませんが、これも絶対の基盤、仏心の真実に還える者の上に、われならぬわれとして味わされることでありましょう。

京都に広沢の池があります。

うつるとは月もおもわず、うつすとは水もおもわぬ
広沢の池

という古歌を新渡戸稲造博士が愛唱していられました。何のはからいもいらず、自然に心の交り真実の友情の至極もこうした趣きである高一高の学生に語られた由であります。が、仏の真実心に満たされる時、相手に求める心も無用となります。求めるのは自分が淋しいからでしょう。又友を選ぶ必要もなく、善悪ともに順縁、逆縁となつて念仏の光照の下に教えられることが多いのであります。

大経に「仏は滅度を示現して拏濟すること極りなし」とありますが、私にとりましては、先生方の浄土に還られましたことは、それによつて真実の同朋、時空を超えた不滅の心の交流の尊さをおしえて下さつて、亡き友を悲しむ涙がそのままにありがたい尊い涙と転じさせて頂けるのであります。

こうしたことをくりかえしまきかえて思念しております時、親鸞聖人の有名なお歌、

われなくも 法はつきまじ和歌の浦の青草人のあらん

念 仏 詩 抄

こんなもの

こんなものを まあ
こんなものを まあ
たすけんとおほしめし
たちける ご本願よ
ご本願よ

こんなものに まあ
こんなものに まあ
念仏もうさんとおもい
たつ心 おこりしよ
おこりしよ

こんなものなれば か
こんなものなれば か

かぎり

一人居てよるこばば二人とおもうべし、二人居てよるこばば三人と思ふべし、その一人は親鸞なりを、あらためて信嘗させて頂きますことであります。

謹んで松本先生の御靈前に蹲いて、四十余年の地上の御交誼を謝し、さらに浄土から、哀憐の御手をさしのべて下さることを重ねて御礼申し上げます。

新春法信抄 (二)

○ 嬉しさのこぼれ初めの 念仏哉(清閉師) 一宮市 寺沢友三郎
○ めでたさも中ぐらいとか お元日 武生市 木村 無相
○ 元旦や今息してる このフシギ 今年まだ死にとうはなしお元日 鹿兒島 法山 竜夫
○ 春うららどこもかしこも念仏かな 京都府 山村 信子
○ 初日影 大きめぐみに遅歩つがらん 新居浜 田中 克己
○ 笠の緒をまた締め直し 老の春 大阪府 新居 貞輔
○ 本願の笛をききつつ歩むかな 一文不知なむあみだぶつ 京都府 佐々木恵性
○ 明け初めて念仏とおひ 風さやか

木 村 無 相

ああ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
もう もう

逆謗・闡提の
わたしゆえ
もう もう
お念仏のほか
ありませぬ

池山栄吉先生
おおせには
//南無阿弥陀仏
これだけだよ

これだけしか
ないんだよ
これだけで
いいんだよ——”

逆謗・闡提の
わたしゆえ
もう
お念仏のほか
ありませぬ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ただ念仏

歎異抄に
親鸞におきては
ただ念仏して
弥陀にたすけられ

まいらすべしと
よき人の仰せをかぶりて
信ずるほかに
別の子細なきなり”
と——

ただ念仏
ただ念仏
//詮ずるところ
愚身の信心におきては
かくのごとし”
と——

ただ念仏
ただ念仏
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ああ 南無阿弥陀仏さま
わたしの
ご本尊さま

南無阿弥陀仏
聖人御筆の
南無阿弥陀仏

南の字
おがんで
ナムアミダブツ

无の字
おがんで
ナムアミダブツ

阿の字
おがんで
ナムアミダブツ

弥の字
おがんで
ナムアミダブツ

陀の字
おがんで

源通寺の遺偈

ナムアミダブツ

仏の字
おがんで
ナムアミダブツ

御蓮台”
おがんで
ナムアミダブツ

ああ
南無阿弥陀仏さま
南無阿弥陀仏さま
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

七十年何の成す所ぞ
都て空事戯事のみ
唯一句の实在する有り
南無阿弥陀仏

源通寺「求道用心集」の遺偈。

求道の枝折

おれを知る

東京に行こうとする時、先ず自分の居場所を知らねばならぬ。名古屋からは東、北海道からは南と、自分の場所によつて方向が定められる。又その方法にしても、航空機、自動車、列車、徒歩と色々あるが、自分の能力を知らねば決定されぬ。航空機は速いが旅費が高い、歩くには足が丈夫でなければならぬ、自動車があつても運転を知らぬと乗るわけにいかぬ。このように自分の能力によつてその方法も定まる。

ソクラテス以来、人類に掲げられた謎は、自分自身を知ることにあつた。ところがゲエテが言うように「自分自身を知れ」という格言は昔からくりかえしまさかえして今日でもよく人の云うことであるが、さて不思議な事には誰一人その言葉に従つた者もなく、又これからも誰一人も従いそのうにもない」と鋭く警告している。

自分のことは自分が一番よく知っている、世間ではよ

国をすて、王位をすてて出家となり、法蔵と名告られた。

やがて王仏のみもとに詣でられ、ひざまづいて礼拝、合掌せられて、仏徳をたたえ奉つた。

光顔は巍々(きぎ)とかがやき、

御威神(みいず)はきわみなくまします。

かかるかがやき、世にもならびなし、

日や、月や、また摩尼宝珠のかがやきも

みなことごとくかくれはてて

さながら聚墨に等しく光を奪われてしまつた云々。

と表白されている。太陽の照り輝く時、地上のローソクも洋灯も電気もそのかがやきはうばわれるように、仏智の照らとすところに、一切智愚の人々が、皆一様に愚にかえて、己が智をかざしていたことを慚愧し、一味の光明界に遊ぶのである。

ここに法蔵菩薩が、みずから聚墨、墨のかたまりであつたと自照せられて、やがて本願をおこし、願行を積まれるのであつた。

善財求道物語

文殊菩薩が出世されたと聞いて沢山の人がつめかけ、その中に一人の青年があつた、名を善財と呼ばれた。彼が生れた時、その家に突然財宝が湧き出して充ちあふれたので、善財と名づけられた。

花田正夫

く云う人があるが、自分勝手な自我像を描いているにすぎない。釈尊は「如何なる名刀も刀自身を斬ることが出来ず、立派な明鏡も鏡自身を写すことが出来ないように、如何なる智慧者といえども身辺三尺は暗闇である」と、その至難というより不可能なことを誠めていられる。

俚言に「十脂の指差すところ」を鏡にせよと教えられるが、自分のひとりよがりて描いた自我像より、十人の人々の眼にうつる自己の姿の方がもっと確かであろう。然しこれも見る人々の色眼鏡はまぬかれない。そこで、智慧と慈悲のきわみのない御仏の目にうつる自分、その仏智の鏡にうつる自己の姿で知らされねばならぬ。「教を攬(と)つて心を照らす」ことを自己を知る大切な道と昔から云われたところである。

法蔵菩薩

世自在王仏の説法を聞かれて、一人の国王が非常に敏び、やがて仏のさとりを得ようと、大菩提心をおこして、

文殊は、群集の中に善財を見出し、法を説いた。善財はその導きを乞うて、ひざまづいて、次のように表白した。

あなあわれ

三有(迷界総稱)を城とし

高慢の垣をもてかこみ

諸の迷いへの門をもち、

染愛の塹(ほり)をめぐらし

愚痴の闇、その空を覆い、

三毒の火、燃えさかっている。

悪魔を王としてつかえ

身の愚鈍のために

惑いをおこし、業を造つて

苦しみの海に

はてしなくさまようている。

文殊よ、善知識よ、

我をみちびき救いたまえ。

まどかな智慧と、

きよらかな慈悲の御手によつて……。

と。文殊とは仏の智慧の権化者である。童子は仏智の光を身にうけて、自分の正体をこのように慚愧して、導きを仰いで、五十三の知識をたずねるのである。

この善財童子の求道物語は、釈尊の求道の象徴とされて

いるが、法蔵菩薩の求道と軌を一つにされて、仏智に照らされて、自己のすがたを知り、求道の旅がはじまっているのである。

法然聖人の自照

法然聖人の観経釈に、「下品上生とは是十悪人なり云々、此品最も要なり、頗る我等が分に相当せり」とある。聖人はこの煩惱具足の凡夫が悪縁にあうて織りなす、十悪を造り慚愧の心もない愚人の上に、自己の姿を見出されて、生涯、愚痴の法然、十悪の法然と名告られて、このたすかるべからざる者を救いとげんと選びにえらばれた選択本願の念仏を渴仰せられたのである。

即ち、仏智に照らし出された愚人悪人の中に自己を発見せられ、「余が如き下機の行法は、阿弥陀仏法蔵因位の昔かねて定めおかるをや」と、落涙千行万行の中に念仏の人となられたのであった。

こうなられるには、善導大師の教えがあった。即ち大師の観無量寿経釈で「凡夫が往生成仏させて頂ける本願がある」と、釈尊の真意を明らかに知らされ、その本願は、称名念仏一つであると思いたられた時であった。

歎異抄二章に、「弥陀の本願まことにおしまさば釈尊の説教虚言したまうべからず、釈尊の説教まことならば善導の御釈虚言なるべからず、善導の御釈まことならば法然

が立派になるために御法を求めているので、云わば商人が品物を売りたいために客に頭を下げているのと同様で、仏を崇び、仰ぐのではなく、自分の願望を満足のために利用していたのであった。

それから、幾年か聞法し、三十近くにいられたが、どうしても分らぬ。それかと云って講話の日に外に出ることも出来ぬままに、どうせ自分のようなものは、えられないまままでやぐぎで終るのだ、と、心を閉したまま会館の一隅で聞いていられた。

そうした或日、嫂のきそ子夫人から「兄さんがいつも、弟を子のように思って育ててきたが、その事についてあれこれ云うことはないが、あれが我慢のやまぬには困ったものだ、可哀相なものだと、愚痴をこぼしていますよ」と聞かれた。それは茶飲み話であったけれど、胸に強くひびいた。そして「兄貴も勝手なものじゃ。自分は信心がないから兄の言う通りに従っている、反対したこともないのに、我慢がやまぬ奴とはあまりにひどい」と心中面白くなくなり、街の散歩に出られた。そうこうしているうちに、待てよ、物の値打ちは買手がつける、自分はどう思っているよ、兄の眼にそう見えるのである。それにしても、その我慢のやまぬ者を、一諸に暮すのはいやだ、出て行けと云わずに、困ったものじゃ、可哀相なものじゃと愚

の仰せそらごとならんや、法然の仰せまことならば親鸞が申すむねまでもてむなしかるべかざる候か云々」とあるように、弥陀、釈迦、善導、法然、親鸞と法水の流れは遠く、一器から一器に伝々相承されている。

親鸞聖人はまた、法然聖人と仏智の化現、大勢至菩薩と仰いでいられる。法然聖人の仰せの中に、相対分別の煩惱に濁った智慧では云えない、仏智のひらめきを仰がれたことによるのであろう。

ここに善財童子が智慧の文殊菩薩に照らされて、自己の愚悪の正体を知らされたように、法然聖人の化導によって、内は愚にして外は賢なる愚禿の身があきらかになり、そこに助かるべからざる者の救いを随喜せられたのである。

近角常音師の聞法

先生はよく言われた。自分で自分を反省しても正しい自分は知れない、私は兄に言われて自分の姿を知らされると共に、仏の救済のおまことを頂いたのであると、いつも話して下さった。

先生は第四高等学校を中退されて、東京の求道学会で常観先生と生活を共にせられた。はじめは、自分が信仰を獲れば兄の様に立派になれると思ひ、そのために熱心に聞法した。これは程なく大きな間違いと知らされた、即ち自分

痴をこぼすのは、いつも胸一杯そう思っていてくれるからであると気づくと共に、これは不思議なものもあるものじゃ、この心は普通の兄弟の心ではない、ありがたいなあ！となり、それがそのまま如来聖人の思召しであったと、兄の言葉を通じて仏のおまことを知らされた。

すると、自分が兄に我慢を出していない、よく知っていると思つたことが我慢であったとなり、自分の全体が我慢のかたまりであった、申しわけないことであったと知らされた。

この心これを阿闍世とのたまたいで見捨てじという御慈悲なりしか

よしあしは人にはあらん大悪の阿闍世われにはよしあしはなし

等はその当時の作かと想像している。この先生は、兄が、兄がいつも繰り返された心中には、観音の慈悲と、勢至の智慧を仰がれたことであらう。

この先生の御体験によって、自分の正体は、仏の智慧から照らし出されたまんまを、よき人によって知らされてはじめて明らかになるので、自分が自分をよいと見るのも、わるいと見るのも皆迷いに根ざす妄念妄想にすぎぬと知らされるのである。それは法蔵菩薩、善財童子、法然聖人、親鸞聖人と伝々相承された確かな道で、古今東西を問わず内外をえらばず軌を一つにされる念仏の白道である。



あとがき

九年に京都の永田文昌堂から再版された書から、追悼の心をこめて少々抜き出させて頂きました。すでに旧臘二十四日に急逝されましたが、無声の身を持たれて、いよいよ障り多きに徳多き御信味を私共に願って下さったものであります。
「一道会の記」はお忙しい中をテープから写して榊原師からいただきました。昨春亡くなられた松本解雄先生を偲び一期一会の集いであります。

福島政雄先生御逝去

二月三日御老衰のため東京都世田谷区上北沢五ノ三八ノ六の御自宅で逝去さる。八十六歳。謹んで哀悼申し上げます。

・ 図書紹介 ・

信仰体験録

安波 勲 八著

第一篇 死の宣告を受けて

第二篇 余が入信の径路

第三篇 信仰と真理

第四篇 随想録

定価 一、〇〇〇円

振替口座 京都七七三四

京都市左京区高野泉町四〇

文明堂発行

心光照護の下に 花田正夫著

第一篇 逝きませし恩師のことども

第二篇 心光照護の下に

定価 八〇〇円 送料 一六〇円

京都市下京区堀川通花屋町百華苑
振替口座 京都二五七八八

◆ 御案内

○ 毎月第一、二、三日曜、午後一時半。

一道会例会

市バス、新郊通り一丁目下車。

地下鉄、新瑞橋終点下車。

名鉄、呼続下車、徒歩二十分。

○ 毎月二十四日、午前午後教西寺法話会。

昭和小桜町二ノ四番地。

市バス、御器所通り下車、又は北山下車

定価 半年 五〇〇円 (送共)
一年 一〇〇〇円 (送共)

名古屋市南区駄上町二ノ八八

編集・発行人 花田正夫

電話八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷人 坂部光

名古屋市南区駄上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座 名古屋一〇四七〇番

郵便番号 四五七

二月は釈尊の涅槃会と和国の教主聖徳太子の御忌月であります。釈尊は如来常住、一切衆生必具仏性とねんごろにお説きのこし下され、太子は、世間虚仮、唯仏是真を信証されて よるべき身のついのよるべを掲げて下さったのであります。然し眼が外に向ってついているように、私共の心も外に向ってばかりいて、世間虚仮ときいてもひとごと、よそごとにして仕舞い勝ちであります。自分自身が虚仮であると知らされて、この虚仮の身に遠い昔から、四方八方から救いの御手のさしのべられていることが仰がれるのであります。二月の聖月、あたらしく二尊のお導きを仰いで初春の門出とさせて頂きましょう。

池山先生の「親鸞聖人と私」は大正十一年東本願寺発行の『教化』から頂きました。この年私は六高に入学したので、池山先生からドイツ語を学びはじめた頃で、関東の大震災のあったことも思い出します。

高千穂師の「逆境の恩恵」は、昭和四十